

學界展望

清初史研究の現状

展望などゝは大袈裟で實はこのごろの筆者の机邊に一寸ばかり見廻はしたに過ぎんものであることを最初にお断り申しておく。

清初史の研究に一大變革を與へたものは謂ふまでもなく、かの明清時代の莫大な檔案類の出現である。歪曲され隠匿されてゐた幾多清初の史實は之によつて訂正され暴露された。故内藤博士を始め日本學者のこの方面に於ける功績は殊に甚大であつた。而も尙、今以て尨大な史料整理の時期を出ないといふのが大略の状況である。先づ目まぐるしくも新出するこの方面の史料に徹底的な批判を加へておかなければならぬのである。錯雜混迷多岐多様の史料を徒らに無批判に取り入れた論作はたゞ紙堆の勞作にしか過ぎぬ。

従つて現在、何といつても先づ注目せられるのは北

平故宮博物院文獻館の業績である。こゝにうなる程所藏せられた實録や檔案の類は清初史家垂涎羨望の的である。近く日滿文化協會の手で清朝全代の實録が景印出版されることは悦ぶ可きことには相違ないが、實は清初史研究者の立場からすれば、文獻館所藏の古い實録の方が幾層倍見たいものであるか知れない。清初期の研究に主として必要なものは、太祖、太宗、世祖三朝の實録である。然るに此等の實録は改修重修を経て乾隆の所謂定修時迄には幾多の史實が曲筆され消抹されたのである。日滿文化協會の手で出版するのは、この定修本である。文獻館の方には太祖、太宗、世祖三朝の初修實録が、而も滿蒙漢三體とも揃つて残つてゐたことが先頃判明した。このうちの漢文太祖實録と、それから又乾隆修定の太祖實録とは已に鉛印出版されてゐるが、今度は太宗實録の方が近く出刊されるらしい。これは順治初修本に康熙改修本、乾隆修定本を併

せ校勘して出すといふのだから全く期待ものである。日本でもせめて康熙改修の太祖實錄(逸存書である)位出版する様奮發しては如何。更に聞くところによると一時南遷してゐた滿文原檔も此頃又、文獻館に歸藏され、奉寬や李德啓によつて整理出版の準備が進められてゐるといふ。これは實錄よりは或る意味に於いて更に重要な清初の根本史料であり、日本では已に故藤岡博士が乾隆の重鈔本について全文を譯出して居られた。尙、若干未定稿の部分があるため未だに出版の運びに至らぬのださうだが惜しいことである。支那で先失敬されぬ様、遺稿整理者は頑張られ度し。滿文關係のものではこの夏、李德啓の著はした「阿濟格略明事件之滿文木牌」も興味深いものであつた。木牌記載の滿文によつて特に或る史實が明瞭になるとか補足されるとかいふ種類のものではないが、記録にのみ見えてゐた滿文檔子の實物を現出し、滿文史資料としても参考になる點の尠くないらしいのが結構である。檔案類も亦一時休止してゐた文獻叢編を續刊して次々に整理發表してゐるし、綜括的なものとしては、集刊の明清檔案專號に最近の研究を網羅してゐる。これは嘗

に文獻館の檔案に就いてのみでなく、中央研究院歴史語言研究所、北京大學、清華大學等の檔案に就いても夫々徐中舒以下二三氏の分擔執筆したもの、又、文獻館の實錄、起居注、其他一切檔案類の總目としては、「清内閣貯舊檔輯刊」六冊一部の便利な編著も出された。方甦生の同書叙録は文獻學的に有益なものである。

文獻館の事業に次いで、孟森、謝國楨兩氏の活躍は相變らず目覺ましい。謝國楨は専ら清初史料の研究によつて名を得、一昨年は「晚明史籍考」の好著によつて一躍南京大學教授の職を得たとか、近くは「明清之際黨社運動考」等の著作がある。孟森の昨今は特に精氣横溢せる感がある。「明元清系通紀」「清初三大疑案考實」等の著述を始め、雜誌類に散見する論文も多い。氏は明元清系通紀の巻頭に序して「自分が清初の歴史の研究に従事してから已に廿年、其の間思ひの積むもの漸く大をなした。今著はす明元清系通紀第一冊は、たゞに肇祖のことを述ぶるのみで、已に三百頁に達した。肇祖に關し實錄に述ぶる所は半頁に足らない。而もこの多量の述作になつたことを思ふと、今後著はさんと欲する所は果して幾何量に達するか吾乍ら分らな

い。」と述べてゐる。氏の論文には往々承服し難い獨斷があるけれども、意氣や壯、切に大完成を祈らざるを得ない。

出版の方で注意されるのは、國學文庫の中に滿洲實錄、四夷考、皇明四夷考、皇明經濟文錄、萬曆武功錄等清初史に關した部分が續々便利安價な體裁で出版されつゝあることで、確かに時潮に乗る斯學勃興の機運の存することを語るものであらう。此の種のものを安價に手早くやることでは日本は到底敵はない。

一步滿洲に入ると、こゝではまづ清朝實錄の出版といふ大事業が光つてゐる。初期に關した部分は文獻館の古い實錄の出版された方が難有い様なものだと云つたが、然しそれはよくと云ふもので、乾隆の修定本だとして太祖實錄外は從來見るを得なかつたものである。且つ又特に完全な滿洲實錄の景印本が含まれてゐることも看過出来ない。實錄の滿蒙文なるものは、これによつて始めて一般に知り得る様になつたのである。

奉天の園田一龜氏は相繼いで清初關係の好論文を發表されてゐる。滿洲學報に掲載された「明萬曆初期に於ける遼東女直の消長一なる長論文は萬曆武功錄を主

資料とした力篇で清初史界近時の好收獲である。村田博士は建築史の權威、奉天の故宮を始め孔子廟、堂子等清初の建築史方面に異色を示され、研究は滿洲學報や滿蒙などに見えて居る。在滿の人として獨人ワルター・フックス氏も特異の存在である。今春頃新聞で騒がれた熱河の滿蒙文大藏經なども、實は已に四五年前に氏が學界に紹介してゐたものである。史料的研究を主とし清初史に關する造詣が深い。滿人には金毓紱氏の業績が著しい。氏には清初史に關する論述は無いけれ共、その刊する遼海叢書中に遼東志、全遼志を始め柳邊略紀、鳳城瑣錄、藩故其他清初史關係の古典を多分に収録して學界に與へた便益は大きい。大連に於ける羅氏の書庫が豐饒な清初の史料を藏有することは已に著聞してゐる。檔案類は専ら松崎氏の手によつて整理進捗しつゝありと聞く。その目錄は已に印行され、又主要なるものは史料叢編、國朝史料零拾其他に収録して漸次出刊されつゝある。今夏刊行の太祖實錄稿本三種などは貴重すべきものであつた。

南下して半島に入ると、こゝには斯界の大御所稻葉博士が高弟田川孝三學士を引具して堂々獨特の論陣を

張つて居られる。もとより清初史の如きは博士の學問の一部門に過ぎないのだが、而も斯學に入らんとするもの一度は博士の門を叩かざる可からず。近刊の増補滿洲發達史は勿論清初の歴史のみを説いたものではないが、この部門のみをとつても最も精彩ある清初史總説である。田川學士の毛文龍の研究、藩館藩獄問題の研究は已に定評あり、稻葉博士と共に朝鮮史料を縦横に驅使して論述を進むるところにユニークな立場がある。清初史に於ける朝鮮史料の重要性に就いては贅言するまでもない。

最後に日本内地の展望に入つたのは些さか前後顛倒の感があるが、こゝにはまづ周知の如く廣島文理大鷲淵一助教授の赫々たる存在がある。教授の特技は勘能なる語學にある。清初史學の研究には最も重要な滿蒙語特に滿洲語に長じ、早くから滿文老檔に注目してその史料の價值を唱導せられた。教授の論文には殆んど必ず滿文老檔中から引用した長滿文の譯述されてゐることが特長である。先頃清太祖の七大恨に就いて、教授の研究と(史學研究第(六卷三號)孟森氏の研究(一期)とが殆んど時を同うして發表されたが、この二研究を比較す

ることは、斯學に於いて如何に滿洲語の知識が重要であるかを示す好適例となるものである。教授は例によつて滿文老檔の七大恨記事を全譯して示された。然るに孟森氏は滿文老檔を顧みるを得なかつたため、七大恨の眞本研究と題し乍ら實は眞本に到達し得なかつた。七大恨の最本來の形は滿文老檔に記載されたものなのである。(と筆者は思ふ)教授の近業に内藤博士の遺著増補滿洲寫眞帖の編纂あり、世界文化史大系に執筆された滿洲史がある。何れも本誌中に紹介批評あり参照あり度い。語學關係では京大山本守學士の滿洲語研究も常に清初史と深い連關を持續して、この方面に独自の境域を開拓されつゝある。

京大羽田博士門下には滿蒙史の研究を専門とする數名の一團がある。うち三田村泰助等一兩名の明實錄中から抄録しつゝある滿蒙史料中には清初に關した部分が特に多い。これと同種の事業として東大池内博士指導下には李朝實錄中から又京城帝大では備邊司謄録中から滿洲史料を採録されつゝある。明實錄の抄録といひ、又李朝實錄の抄録といひ何れも已にかつて故内藤博士の滿蒙叢書中に編入すべく企畫されたことのある

ものである。明實録や李朝實録或ひは備邊司謄録などいふものは何處でも容易に見るといふことは出来ぬ。見ることが出来ても、かの何百何千冊に達する膨大な實録中から所要の關係記事を盡く検索することは並大抵のことでない。而も清初の歴史を究めんとするものに、この兩實録が重要不可缺のものであつて見れば、その抄録が完成刊行された曉の利便は蓋し甚大なものであらう。

尙斯學に關する蘊蓄に於いては、矢野博士の該博、市村博士の深奥、和田東大教授の精銳などにこゝに贅言するまでもない。特に清初史に關した近業を知らないのみである。

さてかく眺めきたつて痛感されることは、已に初頭述べたが如く、清初史は未だ全く史料整理時代の域を脱せず、複雑多岐な清初史に對し未だ何物も融合統一の業績の現はれてゐないことである。その起さる可き氣運が、近來この方面に對する關心の昂まると共に一部に濃厚に動いてゐないのではない。然し乍ら現在の如く、支那日本に跨つて散在する莫大な資料の操作に尙殆んど共同連絡のつけられてゐない有様では、實は

綜合統一的な業績の建設は甚だしく困難なのである。文獻館を中心に資料刊行のことは相當活潑に運ばれつゝあるけれ共、尙未刊行の部分が幾十幾百倍してゐるアトランダムに新資料、珍資料とのみ追ひ廻はしてゐる現状かに思はれる。満足すべき状態ではない。一日も早く大々的に綜合統一された關係事業の起されることが望ましい。(今 西)

表題の文字は羽田先生に執筆お願いした。先生は最初一度執筆を御承諾あり乍ら、數日して「執筆中不圖思ふに雜誌などの表題は活字にしておいて變更の自由を残しておくに如くはない。余は書くを止めた。」と心境の異變を申し出され、頑としてお曲げにならぬ。同人を代表してお願ひした左傳子、ことごとく面目玉を潰されたが、止むを得んで活字で組むことにして、さて發行所と印刷所とにあたつて見ると、こゝで亦表題には肉筆を得ることの上乗なるを力説して止まぬ。左傳子遂に懺然として先生の書齋を衝いた。有り難くも嬉しかったことは、先生の屠籠中にちやんと「東洋史研究」の美事數通の文字が遺存してゐたことである。従つて執筆をお願いしたとは云ひ乍ら實は強奪に等しい程の非禮を敢へてしたことのお詫びを、こゝに感謝の辭と共に先生に申し上げねばならぬ。(左傳子)